聖霊降臨後第２５主日（こども祝福式）　2026年１１月１５日

風のように　甘木教会



主任牧師：崔大凡　　牧会委嘱牧師：竹田孝一

そのとき、イエスに手を置いて祈っていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。 しかし、イエスは言われた。「子供たちを来させなさい。わたしのところに来るのを妨げてはならない。天の国はこのような者たちのものである。」 そして、子供たちに手を置いてから、そこを立ち去られた。　　マタイによる福音書１９：１３～１５

【説教要旨】

こどもの健康を願って江戸時代に始まった関東の風俗であったものが全国に広がっていった七五三の行事を教会の大切な行事として、教会でも、「こども祝福式」として行ってきました。その国、その地にあって、またその国、その地にある習俗をキリスト教に合わせていくことを土着化というのです。キリスト教がヨーロッパに伝道していく初期はダイナミックに土着化を進めていきました。冬至祭をクリスマスに飲み込んでいったことは代表的なキリスト教が土着化したものでした。

「そのとき、イエスに手を置いて祈っていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。しかし、イエスは言われた。『子供たちを来させなさい。わたしのところに来るのを妨げてはならない。天の国はこのような者たちのものである。』」



病気を癒すなどの奇蹟を起こしていたイエスさまは特別な力があるお方だと知られていました。親たちは、子どもの幸せを願って、イエスさまのところにやってきます。特別の方から**手を置いて祈って**いただくことは、こどもたちに特別の力が与えられると言われていたからです。幸せを心から願っての親の思いです。

今日、ここに来られているのもきっとイエスさまのところに連れてきた親の思いとみなさんは同じではないでしょうか。現代の昨日と今日、今日と明日がまったく繋がらない不連続の中で大変化していく時代を生きている子どもの幸せを願う思いが強くなるのではないでしょうか。しかし、強くなれば強くなるほど幸せはけっして簡単に与えられるものではないことを私たちは知っているからではないでしょうか。子どもが生き残るために親は必死です。

「弟子たちはこの人々を叱った。」幸せを妨げるものがある。これが子どもたちより先に生きた親たちの体験であり、経験であります。

幸せを妨げるものが私たちの前にあるのが現実で、試練が待ち受けていることを容易に想像できます。

「世界の標準の子育て」という本の中で、「彼ら（活躍している人）はみな、優秀だったわけではないのです。**誰もが一度は『競争の壁』に阻まれ、挫折や自信喪失を経験していきます。**

その時支えになるのが、困難に負けない『強い心』です。強い心は、子どもが勝手に身につけるものではありません。育て方によって身に着く、後天的な資質なのです」と言っています。

妨げられる、あるいは阻止されることがある。今日の物語はイエスさまを前にしても妨げられる、あるいは阻止される子どもがいるのです。しかし、**阻まれ、挫折や自信喪失を経験していくこと、**試練を私たちの教会を設立したルターは、神さまの恵みと捉えています。

試練を美的でも倫理的でも、また教義的でもなく、全く超越的であり、日常の安定した親しい間の世界が崩壊し、自己の在り方が根底的に震撼されるときであり、ここで人が神さまとの関係の中で単独者として立っていくことが再創造されるというのです。「その時支えになるのが、困難に負けない『強い心』

です。」という『強い心』です。
人と神さまとの関係とは、「**しかし、イエスは言われた。『子供たちを来させなさい。わたしのところに来るのを妨げてはならない。天の国はこのような者たちのものである。』**」ということです。誰もが、女か男か、こどもかということで、妨げられる、あるいは阻止されることはない。凡てが等しく**天の国**、すなわち神さまの支配、愛を与えられて祝福されるものとされているとイエスさまは言われます。イエス・キリストによって愛されている私と神の関係が確かなこと、イエス・キリストへの全体信頼において、困難に負けない『強い心』を私たちに与えられるのです。

文科省が出した「新幼稚園教育要領」で「愛着」という言葉があります。幼児期に十分に愛されたことを着るということです。それが目標達成・欲求の抑制の自己、他者の気持ちを理解する他者理解、他者に利益をもたらす意図に基づく自発的行動を作るというのです。

イエスの弟子であるパウロは、イエス・キリストの愛の絶対信頼こそ、「**わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能。フィリピの信徒への手紙4:13**」とされると言っています。私たちがすべてにおいて可能とされるのは世の中の力だと思っていますが違うのです。私たちが何よりも神さまに愛されている自信（愛着）であり、困難があってもそこで神の愛に向かう力であり、愛されていることを五感で感じるゆえに、自己中心から神、愛中心に転換し、もはや自分のために生きないで、他者のために生きる愛のわざに励むのです。

イエスさまの祝福は、「**わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能**」となる恵みを私たちに、子どもたちに与えてくださるのです。

イエスさまの、神の愛が、こどもたち一人一人の心に注がれています。安心してここをでて、ご一緒に子育てをしていきましょう。

牧師室の小窓からのぞいてみると



対話よりも力をもって世界秩序を整えようとするトランプ大統領、中国の習近平国家主席、ロシアのプーチン大統領は、それぞれの理はあるだろうが、世界の終わりへと導いているように思える。世界は対話がとぎれがちになっている。「十戒」について、フラチェスコ教皇は、「それではなぜ、聖書記者はここで『十のことば』という表現を用いたのでしょう。どうしてでしょうか。なぜ、『十の戒め』とはいわないのでしょう。おきてとことばの違いは何でしょうか。おきては、対話を必要としないコミュニケーション（情報伝達）です。他方ことばは、対話のようなかかわりにはかかせない媒介です。父なる神は、ご自分のことばを通して創造されました。」と言われている。それぞれの戒め（理、主義）によって世界を作っていくのでなく、それぞれのことばをもって会話をし、平和の世界を作ってほしいと強く祈っています。

園長・瞑想？迷走記。



牧師が園長であるということはどういうことかな。幼児教育は伝道の一つである。そして、神学を学ぶということは教育にも通じる。実際、心理学、教育学び、実践神学で多くのことを学ぶ。

そもそも、伝道を信者獲得と考えているのが間違いである。伝道は信者獲得でなく他者のために仕えていく業である。子どもに仕えていくという幼児教育は立派な伝道の業である。

イエスは言われた。「子供たちを来させなさい。わたしのところに来るのを妨げてはならない。天の国はこのような者たちのものである。」 そして、子供たちに手を置いてから、そこを立ち去られた。神学は神の愛を学び、神の愛を他者に伝えいくかという実践学である。牧師は聖書の学びを中心として教育学、心理学、音楽を学んでいく。

教育・保育を専門と学んだ専門家の幼児教育・保育への切り込み方、もう一つの切り込み方は神学をもって幼児教育に向かい合う切り込み。これが牧師・園長ではないかと思う。

日毎の糧



聖書：生涯の日を正しく数えるように教えてください。
知恵ある心を得ることができますように。

詩篇９０：１２（新共同訳）



ルターの言葉から

福音の声は「死のさ中にあってわたしたちは生のうちにある」と歌って力づける。　『生と死の講話』M.ルター著、金子晴勇訳、知泉書館

人生を最良に生きよとする意志

詩篇９０篇は、葬儀のおり、読まれる詩篇として有名である。ルターは、詩篇９０篇の講解をした。キリスト教西洋史を確立した石原謙氏は、死を前にして、ルターの「詩篇９０篇の講解」を何度も読んでいたというエピソードは有名である。ルター学者、故金子晴勇先生は、生涯の仕事としてルターの「詩篇９０篇の講解」を翻訳した。讃美歌８８は、詩編９０篇による。

「旧約聖書の人間観を知る重要な資料。この人間観には基本に命のはかなさ、人生の労苦に対する嘆きがあり、その上になお、与えられた人生を最良に生きよとする意志がある。」①というように、「なお、与えられた人生を最良に生きよとする意志」こそ神の御心で、私たちが十分に満足して生きていくことです。

「知恵ある心を得ることができますように。」とあるように、「人生がいかにはかなくとも、人間はなお永遠の神の意思に生かされている。そう知るところに聖書の『知恵』がある。詩篇139：６－１７，コヘレト３：１１など参照」②

神のなされることは皆その時にかなって美しい。神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされるわざを初めから終りまで見きわめることはできない。

コヘレト３：１１

①新共同訳　旧約聖書注解Ⅱ　太田道子　日本基督教団出版局
②詩編の思想と信仰Ⅳ　月本照男　新教出版

祈り：神さま人生を良く生きる知恵を与えてください。

アーメン。

甘木通信



人が未来について無知であるようにと。
コヘレト７章１４節
自らの分をわきまえ、その労苦の結果を楽しむように定められている。　コヘレト６章１８節

ワクワク楽しむ

「愛子さんのなんか変だね　柴田愛子著　暮らしの手帳」のという本は保育について書いているが、よくよく読んでみると愛子さんの保育哲学であり、同時に人が生きるということの哲学でもあると楽しく読んだ。

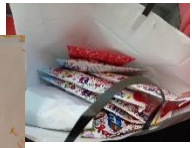
「未来のことは、未来に考えましょう。心配するよりも、ワクワク楽しみませんか」とい言葉がある。40 代の方が「仕事と子育ての手が離れたら、次の目標が見つかるか心配」という相談者への答えである。

人生の達人、コヘレトも同じようなことを言っています。未来に対して無知であれと、そして、今を楽しむことそれが人に与えられた分だと。

よく「先をみて、考え、ことをしなさい」と後先を考えない私は母に叱られたものである。私は未来を考えられない質である。よく、教会で未来構想ということを言っているが、私はどこかであほらしいと思っている。未来のことは未来が考える。今日が大切だと。だから今日を生きるということを必死に考える。必死が真面目さでなく、楽しさでないといけないと老いてますます思うようになった。楽しんで今を生きていると未来は未来が考えるように未来の方が飛んでやってくる。「思い煩うな。明日のことは明日自ら思い悩む」とイエスさまの言葉を思い出す。

（甘木日記）土）東京を子ども祝福式の準備の買い物、病床訪問と駆けずり回る。うん、命の蝋燭の灯も消えそうだから。日）色々な事情により、出席者が少ない。月）休みだが幼稚園に遅くまでいて仕事。夜は雨。火）新法の準備と春に向けて準備。水）大学病院での診断、午後から職員会議、大相撲九州場所を観にきた友人と夕食。木）松崎保育園で子ども祝福式の礼拝、聖和幼稚の庭に蓮華の種を蒔く。夕刻、研修。金）日善幼稚園の堆肥構を掘るとミミズ一杯。上手く出来たかな。

おまけ・牧師のぐち（続日記）牧師だって神さまの前でぐちります。はぐちらない聖人（牧師）もいますが。





土）早朝、昨日の管理者会議の議事録を作り発送。今日は子ども祝福式の準備、病床訪問、主日のお菓子の購入で東京を走る。まずは主日の礼拝後のお菓子の準備。御徒町で降りて、大心堂の雷おこし「古代」を購入。四谷に移動し、途中、妻のためにに煎餅を。カトリックのショップでクリスマスの準備と思い行くがお休み。銀座に。不二家で、子ども祝福式のミルキーの千歳飴を購入。教文館に寄り、病床訪問のためにアドヴェントカレンダーを購入。品川から息子に孫に購入した千歳飴を取りに来て欲しい電話するが用事こられないと。旗の台の病院に病床訪問。リハビリー中で会えずに置手紙とクリスマスカレンダー置いて失礼する。夜、福岡に着。走らされている。昨日は立冬。夜は冷えた。



日）礼拝出席も色々な事情で少ない。ゆっくりと教会会で昼を過ごす。珍しい果物フェイジョアがだされ、飢えた薩摩芋を掘り。夕刻、日が沈んで帰宅。月）今日は休みだが気になることもあり、幼稚園に出勤。その前に今回、地区の研修会の責任と取られている園長先生に今度の講師の最近の本を持っていく。遅くまで園でいた。すべきことが多くある。キリストを見つめて進まないと力は湧いてこない。火）園児を迎え、国の新法へむけての両園の準備をする。チューリップを植えるプランタの土地を準備し、年中組の子どもらと通園バスでホームセンターにチューリップの球根を買いに行く。咲くと良いね。春の準備といやな新法の準備。水）午前中は、大学病院に診察にいく。順調に回復していると。次回は CR 検査。幼稚園に戻り、職員会議、夜は大相撲九州場所を見に来た友人と食事。木）松崎保育園で車から降りると茶花ホトトギスの花が咲いている。保護者といっしょに子ども祝福式。子育てに頑張っているだろうから、励ましのメッセージを届けたかった今、読んでいる「幼子とともに　祈りの中の保育　石崎秀雄教文館」の言葉を紹介。「保育者が笑い、保護者が笑い、子どもが笑う」。楽しくなる言葉ですね。午後から甘木教会で堆肥構を掘り起こし、また、庭の隅に蓮華の種を蒔く。夕刻から研修に。金）日善幼稚園の堆肥構を掘り起こすとミミズがいっぱい。「出来た、出来た」と喜ぶ。プランタの土にする。遅いが春花壇の準備。



